

わたしの修習時代

紀尾井町：1948-70

湯島：1971-93

和光：1994-

55期(2001/平成13年)

大らかな自然と空気に囲まれて



会員 石部 享士 (55期)

修習というと、前期後期の集合修習もさりながら、静岡での実務修習が強く印象に残っています。

私は、それまで実家暮らしでしたので、初めての一人暮らし。そして、伊豆半島や浜松と違い、静岡市は、足を踏み入れたこともなく、正直「お茶とみかん」のイメージくらいしかなく、実務修習前は若干不安も覚えました。

しかし、いざ始まってみると、それは杞憂に終わりました。最初が検察修習で、当時10名の修習生全員が同じ部屋となり、取調べは各人の机の周りに移動式のパーテーションを置いて行うのですが、他の修習生の取調べの様子をうかがったり、興味深い事案の内容や被疑者の様子を話し合ったりするうちに、お互いの人となりも分かってきました。そして、修習後に居酒屋へ行ったり、お互いの部屋を行き来したりするうちに、ほどなく仲良くなりました。当時は、サッカーW杯の直前で、フリーガンを警戒した警察が事件送致を控え、修習生に回ってくる事件の数は少なかったのですが、軽い刑の犯罪でも、被疑者から真実を聞き出す難しさを実感しました。なお、W杯では、直前のグラウンドに薬品を播いた件で逮捕者が出ただけで、開催中は逮捕者が出ず、取扱い事件数は増えませんでした。そして、東京に泊まりの研修旅行があり、東京地検の大部屋修習の規模に驚いたのですが、その晩、酔って宿舎に戻ったところ、テレビで「9.11テロ」の様子が流れ、さらに驚きました。翌日見学した羽田空港は、全く人がおらず、異様な雰囲気だったことを思い出します。

その後の弁護修習では、夫が愛人と一緒にいる現場

を押さえようと、学生バイトを使った張り込み・追跡の現場に立ち会ったり、また、浜松では、ギャングブルにのめり込む人の気持ちを知るため競艇見学&体験をしたりと、色々な経験をさせていただきました。東京に比べれば小規模ゆえ、同じ弁護士と何度も事件で顔を合わせることによるやりやすさと、やりにくさも感じました。

裁判修習では、所属した民事部の合議で、部長の意見といえども、左右の陪席裁判官の意見の前に不採用となったところを目の当たりにして驚きつつも感心し、また、刑事では、裁判官が、修習生にも意見を求めることがあり、法廷での厳然とした姿は、色々な迷いや悩みを経た結果なのだとということも分かりました。

静岡は、気候の影響もあるのか住民の気質も比較的穏やかで、事件数に占める和解による解決の割合が、全国的にも高かったようです。そうした穏やかな空気に触れ、雄大な富士山をいたるところで目にしつつ、修習をこなしたり、駿府マラソンに挑戦したり、美味しい海産物を食べたりして（今でも桜海老のかき揚げが無性に食べたくなることがあります）、のびのびと一年間を過ごし、今から思うと随分と失礼なこともしましたが、指導担当官も他の実務家や職員の方々も、大らかに受け入れてくださいました……そう思い込んでいるだけかもしれませんが、修習で見た法曹三者の姿が、実務に就いた今も、他の法曹への信頼の基礎になっている気がします。

何かと厳しい世の中ではありますが、修習時を振り返り、当時の大らかで伸びやかな気持ちを忘れずにいたいものだと思います。